

高校生の語彙使用に関する一考察

— 「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」応募作品の分析をもとに —

林 香織

江戸川大学
マス・コミュニケーション学科 専任講師

佐藤 毅

江戸川大学
マス・コミュニケーション学科 教授

廣田 有里

江戸川大学
情報文化学科 准教授

要 旨

本研究は、2011年度から行われている本学主催の「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」に応募された作品を分析し、短歌・川柳・俳句創作における高校生の語彙使用の傾向を検討したものである。まず、応募作品を種別・学年・応募者の居住地の面から分析し、傾向を調べた。次に、テキストマイニングにより語彙分析を行い、頻出単語と作品の分析を行った。分析結果より見えてきた現代の若者像と時代相を報告する。

キーワード：ケータイ、短歌、川柳、俳句、高校生、語彙分析、テキストマイニング

はじめに

本稿は、高校生の語彙使用の傾向を考察するものである。携帯電話やスマートフォンが普及し、若年層を中心にソーシャルネットワークサービス(以下、SNS)の利用者が拡大している。大学生のSNS利用を観察していると、SNSのサービスの中でも、Line、Twitterの利用率が非常に高い(林2013)。Twitterには140字の文字制限があり、Lineではスタンプ機能ももちいた短い言葉のやり取りで、コミュニケーションを成立させているのがみてとれる。コミュニケーションを円滑に進めるために選択される言葉は、長ければよいというものではない。だが、短いやり取りや絵文字、顔文字を用いた若年層のコミュニケーション形態は、国語力の低下や人間関係希薄論の論拠として挙げられることもある。しかし、本当に国語力は低下したのであろうか。例えば、Twitter上の字数制限によって様々な言葉の省略形が現れ、新たな言葉として世の中に認知されていった。2013年の3月頃からTwitter上で、怒った状態を指す「おこ」の活用が広まっていった¹という。「おこ」、「まじおこ」「激おこ」といった順番で怒る様子が強まっていくことを指しているのだという。他の言語に比べて日本語は、一つの状態を何種類もの言葉で表現することができる。「とても怒っている」と「とても = very」を重ねるのではなく、別の言葉で表現していくことは、豊かな表現方法の模索ととらえることはできないだろうか。

このように、SNSをごく当たり前利用する若年層の言葉の利用状況を、本稿では短歌・俳句・川柳の創作活動という定型化された環境において、どのような語彙が選択されているのかをテキストマイニングを用いた分析を試みるものである。なお、統計分析に用いたのはSPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1である。また、本研究は2013年度江戸川大学学内共同研究「高校生の表現における単語選択に関する研究—ケータイ韻文コンテスト応募作品のテキストマイニングをもとに—」(研究代表者：植田康孝、研究分担者：下平武治、廣田有里、林香織)の一環で行った。

1. 研究背景

本学が主催で2011年度から「全国高校生ケータイ韻文コンテスト」が行われている。このコンテストは、「高度情報化社会に生きる現代の高校生が、日常のコミュニケーション手段である携帯電話を用い、静かに落ち着いた心で物事を見つめ、心の奥底から湧き上がる感動を、韻文で表現する場」を提供する目的を持っている。短歌、俳句、川柳の3部門があり、高等学校ごとにまとめて提出する団体応募と、個人応募の2つの応募方法を採用している。各部門の団体、個人に賞を設け、入選から最優秀までを表彰している。また団体賞では後援の千葉日報社から千葉日報賞の提供を頂いている。審査員には、市村佑一学長をはじめ、本学マス・コミュニケーション学科の教員が多く顔を揃えている。短歌部門は、歌人であり『水門』選者でもある下平武治教授、日本文学の講義を担当している新井正彦教授の2名で審査にあたっている。俳句部門

¹ ビクシブ百科事典 <http://dic.pixiv.net/> (2013.2.8)

は、本学名誉教授で出版論を担当していた青野丕緒教授、俳人であり博物館学を担当している現代社会学科の高橋克教授が審査を行う。川柳部門は、川柳作家であり本学を擁する東葛の川柳会代表をつとめる江畑哲男氏と、国語表現、現代文学鑑賞を担当する佐藤毅が選考にあたっている。

マス・コミュニケーション学科を志望する高校生は、テレビ制作や雑誌編集への憧れが強い傾向にある。社会学やコミュニケーション学としての「マス・コミュニケーション」を理論として学ぶだけでなく、番組制作のための台本作成と撮影技法、記事作成のための取材技法や編集のスキルを体得していくのが、カリキュラムの特徴として挙げられる。学科の設立当初から最も重要視されていたのは、文章力の向上である。企業としてのマスコミの本質は、情報を伝えるための媒体という点にある。人にどのようにしたら自分の考えを伝えることができるか、その能力の向上のために文章力には特に力を入れて指導に当たってきた経緯がある。それゆえ、マス・コミュニケーション学科には、日本文学を研究領域とし、取材学や文学鑑賞といった視点で講義を行う教員が中心となって、文章力向上につとめてきた。結果、地元紙である千葉日報社

の学生歌壇に掲載される学生をコンスタントに排出し、2011年にはマス・コミュニケーション学科卒業生の高見紗綾さんが「第55回千葉文学賞」を最年少で受賞するなどの教育的な成果を挙げている。

こうした経験を生かし、高校生の若い感性を磨く場を提供することは、大学としての社会貢献の一つの使命と考えられる。2011年からの3年間でこのコンテストに応募された作品の総数は、11,831件にもなる。中には1人で15作品も応募する高校生もおり、創作活動の場として、今後も継続していきたい試みである。が、3年目を迎える本年まで、コンテストに応募された作品は、受賞作が公表されるにとどまっているため、まずは概要をまとめていきたい。

2. コンテストに応募された作品の概要

図1は年度別の応募件数を示したものである。2011年度は2,825件、2012年度は5,156件、2013年度は3,850件となっており、現在までの総数は、11,831件になる。

応募の部門ごとにとみると、最も多いのが短歌で35.0%、次いで俳句(33.3%)、川柳(31.7%)と続く(図2)。

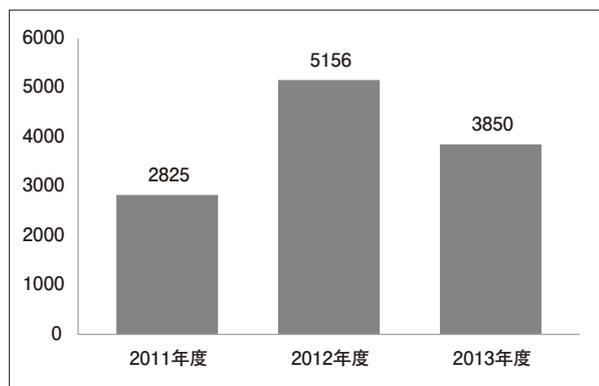


図1 年度別応募件数 (件)

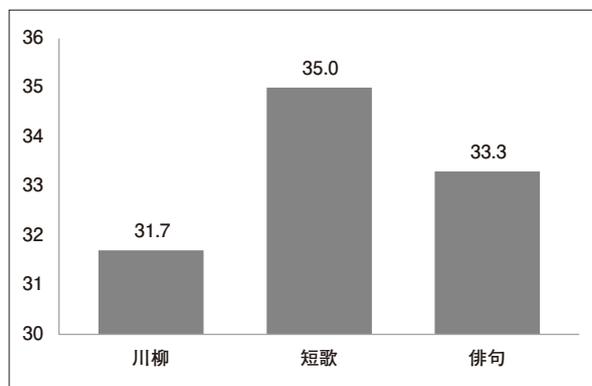


図2 部門別応募状況 (%)

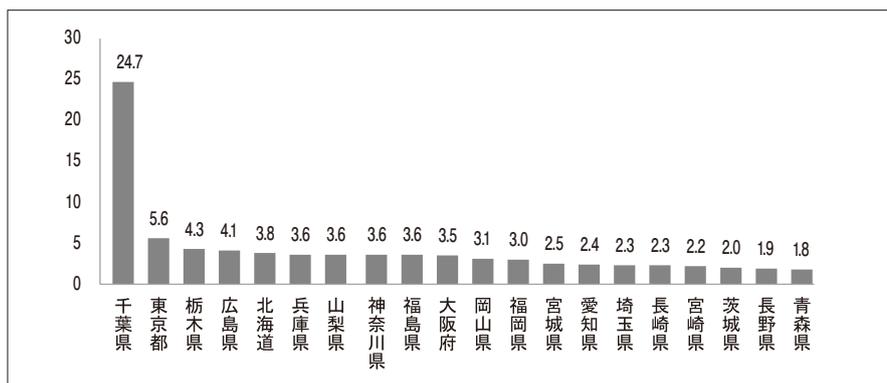


図3 都道府県別応募状況、上位20 (%)

応募者は45都道府県に及び、北海道から沖縄県まで幅広い。ただやはり本学所在地である千葉県内からの応募が最も多く24.7%となっており、東京、栃木、など隣接する都県からの応募が続く。

応募者の学年をみたものが図4になる。なお、応募者のうち0.3%の学年は欠損のため、不明とした。1～3年生までそれほど差はないように見える。だが、年度別に応募者の学年をみると(図5)、1、2年生の応募状況に変化がみてとれる($p < .001$)。この3年間の間、もっとも応募者が増加したのは2年生で、初年度からおよそ2倍になっている。逆に1年生は半数程度に応募が減った。コンテストは本学のウェブ掲載のほか、高校の国語科担当教諭へのお知らせや、オープンキャンパスで本学を訪れる高校生に告知したりといった方法で応募をかけている。授業の中で創作活動を行い、コンテストに団体として応募することを目標に指導する高校教諭も多いことから、高校2年生向けの授業に導入されている可能性が高いこと、オープンキャンパスを訪れる2年生の割合が高いことなどが、このようなデータになる要因と考えられる。

3年間のデータ分析において最も興味深いのは、年度別に応募のあった部門に変化が見られるという点である(図6)。応募総数が最も多いのは短歌だが、実はこの3年間で応募割合が減少している。対照的に、俳句の割合は増加している($p < .000$)。短歌と俳句の違いは、定型詩としての字数や季語の有無にあるわけだが、創作にあたって、5、7、5、7、7で表現する短歌は字数が多い分難しいということの現れなのだろうか。この点の解明については、応募作品の内容分析など、数値データではないアプローチが必要だろう。なお、2013年度に川柳の応募割合が増加している要因と考えられるのが、図7で示した学年別、応募割合である。学年によって、応募部門に偏りがみられる($p < .000$)。1年生は短歌、2年生は川柳、3年生は俳句と学年によって、応募する部門が異なる傾向にあることがわかる。2年生の応募が年々増加していることにより、川柳の応募割合が上昇し、逆に1年生の応募が減少したため、短歌の割合が減ったと考えることができる。

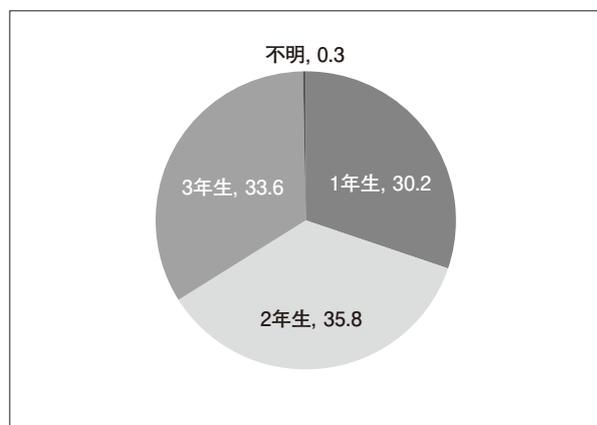


図4 応募者の学年分布 (%)

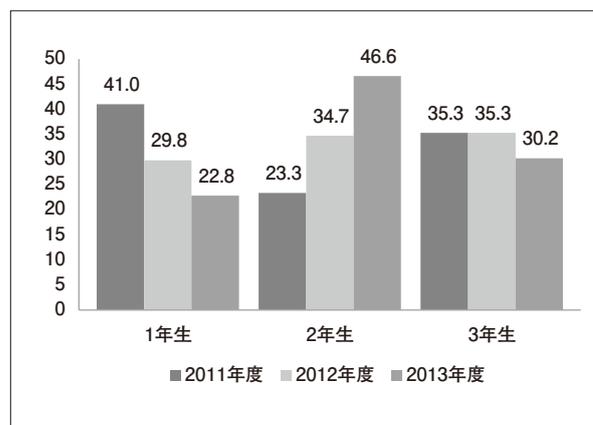


図5 年度別応募者の学年 (%)

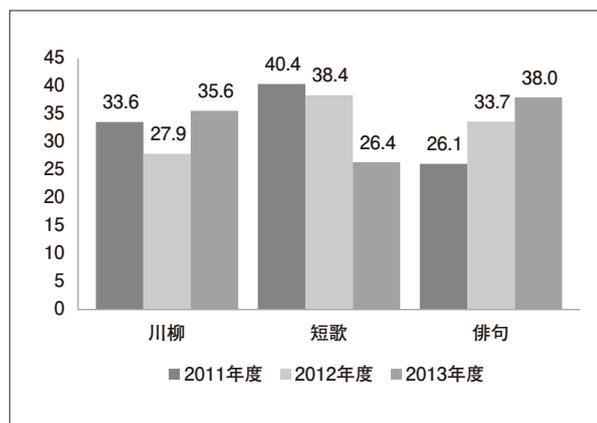


図6 年度別、応募部門の割合 (%)

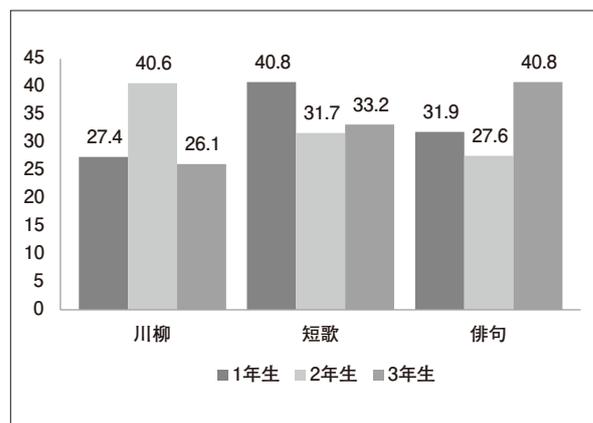


図7 学年別、応募部門の割合 (%)

3. 応募作品にみられる語彙使用

では次に、応募作品に使用された語彙をテキストマイニングで解析していく。そもそもテキストマイニングとは、定型化されていないものから規則性を見出す手法であるため、定型詩の短歌や俳句を自然言語解析として単語レベルに分割することで、何か発見できるのかという向きもあるだろう。対象者が高校生ではないが、短歌研究新人賞受賞作品の分析を試みた梶尾によると、年々歌が長くなっているという(梶尾2008)。その理由として、カタカナ語の使用の増加、文語体から口語体への変遷を指摘している。また、助詞の使い方が特徴的で、助詞を省けば定型となるのに、あくまでも丁寧に入れこみ、自立語を付属語によって「繋ぐ」のではなく「置く」傾向が強まったとも分析している(同掲)。こうした指摘を検証するためには、やはり作品の中の使用語を単語レベルに分解することが求められる。表1は、コンテストに応募された作品に使用された語句を部門ごとに分けたうえ、最頻の10語と使用件数を示したものである。なお、()内は出現件数とした。この最頻語を手掛かりに、応募作品を鑑賞する視点から分析していく。

短歌、俳句、川柳の3部門において、最も多く使われている名詞は「夏」という季節語である。俳句という表現形態では一般的に季語を備えなければならないという制約があるので、それに呼応して「夏」(588句)というふうに季節名称をそのまま用いたのであろう。また、「夏休み」(249句)という語もその延長線上にあるとも考えられるが、単なる季語という様相よりもバカンスとか学校生活からの解放という要素を含むので、単純な季節語である「夏」とは別種の心情を読み取らなければならない。季語という表現上の制約がある俳句においてこの「夏」という語が多く使用さ

れていることの要因は、本コンテストに向けての制作時期が初夏から盛夏にかけてであることが大きく影響していると考えられる。因みに本コンテストの応募締め切りは例年9月下旬となっている。この傾向は、俳句部門だけでなく短歌部門においても「夏」(442首)、川柳部門においても「夏」(233句)という使用頻度の高さから指摘できる。しかし、それだけでなく高校生という若い感性がエネルギッシュな夏の太陽と呼応し易い制作動機があるとも考えられる。

俳句部門の最優秀賞作品である「夏帽子被りて港町に行く」(群馬県立高崎北高等学校、河田玲央奈)などは、単に夏と一光景に止まらず、海のない町に生まれ育った作者が港町を訪ねて颯爽と歩いている光景、その背景に夏の日差しと海の光景が広がっている見事な作品である。ここに示された高校生の軽やかな足取りに若い感性を指摘できるのである。

この作品のように高校生の五感として特筆すべきことは、視覚(映像)に関する鋭敏さにある。それは短歌、俳句、川柳の3部門において色彩語(白、青、赤、黒、黄、他)が多用され、また「まぶしい(眩しい)」、「淡い」等の表現も多く見られる。それに対して聴覚(音)に関しては、セミ(蝉)、花火、風鈴と言った常套的表現に止まり、斬新でかつ多様性を認めることはできなかった。そのような中でも俳句部門優秀賞「せみの声焦る心を加速させ」(千葉県立実羽高等学校、木村知恵海)は、数少ない秀作である。生き急ぐまでに鳴く蝉の喧噪と受験なのか恋心なのか「焦る心」とシンクロする姿が音の中に新鮮である。また、味覚においても「かき氷」「甘い」「冷たい」に止まり、触覚や嗅覚に至ってはほとんど独創的で若い感性を指摘できる作品は見られなかった。

また、多感な十代を象徴する自尊心と羞恥心を映し出す言語(新しい、強い、高い、いい、良い、他)と言語(きつい、幼い、恥ずかしい、痛い、羨ましい、な

表1 応募部門ごとの最頻語(件)

短歌-名詞(4128)		短歌-形容詞(1268)		川柳-名詞(3664)		川柳-形容詞(303)		俳句-名詞(3876)		俳句-形容詞(361)	
夏	442	ない	117	夏	233	ない	61	夏	588	白い	33
君	440	いい	58	ケータイ	201	いい	35	夏休み	249	ない	29
私	286	白い	35	君	197	早い	13	蝉	214	いい	20
空	175	青い	33	夏休み	168	青い	12	秋	214	赤い	18
夜	166	赤い	27	メール	103	高い	11	夜	203	青い	17
秋	166	高い	27	携帯	93	赤い	10	声	194	冷たい	13
夏休み	158	早い	22	心	68	長い	9	空	178	ねむい	12
心	151	小さい	21	夢	67	白い	9	花火	131	まぶしい	11
声	141	大きい	21	母	65	無い	9	君	131	無い	10
夢	131	遠い	20	声	63	黒い	7	風	107	高い	9

い、他)の数は、ほぼ同比率であることが指摘できる。ただポジティブなものよりもネガティブな言葉の方に、より実感がこもっていることに普遍的な若者の苦悩を見ることができる。川柳部門で優秀賞となった「無理だってわかっているけど志望校」(神奈川県立磯子工業高等学校、仲里圭右)などは、自尊心と羞恥心の狭間を等身大の言葉で写し取った名作である。

生活感を示す語としては、「夏休み」、「テスト前」、「夜」、「朝」、「授業中」、「宿題」、「部活動」等といった高校生活に密着したものが多く見られ、日々の実感が創作のエネルギーになっていることが指摘できる。そのような日常生活にあって、高校生の視線の方向は、「日(陽)」、「風」、「雨」、「空」、「夜空」、「海」、「蝉」等に向いている。足下とか地面といった下方に向く作品よりも上方に視線があるのもこの世代の特徴と言える。しかし、そのような中で短歌部門で最優秀賞を受賞した「どれほどの歩幅で歩けば普通かと足先見つめる月曜の朝」(宮城県美田園高等学校、吉田詩織)は、うつむく姿勢の中に激しい内省の力があふれて、読む者の心を打つ。また、俳句部門で優秀賞となった「秋の空坂を半分おりてゆく」(群馬県立高崎北高等学校、東城優花)は、坂を下る途中で天高い初秋の空を見つめて季節の変わり目を実感するという秀句であり、その内面的感慨までも想起させる秀句である。

一方、人間関係に注目してみると「友達」、「君(あなた)」、「私」、「母」等というように狭い生活範囲及び行動範囲に限られる。時事を扱うことに強い特性を持つ川柳においてもその範囲は広がることはない。そのような中において、短歌部門で最優秀賞を受賞した「ばあちゃんの高校時代のフォトを見る自立するぞとメモまで貼られ」(水戸啓明高等学校、鴨志田佳奈)は、祖母と孫との心の交流、そして人生の先輩の苦悩

と決意を追体験して心をつ。生活空間は家族(身内)という狭いものであるが、時間的空間の交流を示した傑作であろう。また、川柳部門で優秀賞となった「お母さんあげておとすのうまいよね」(千葉県立関宿高等学校、倉持里奈)などは、身近な母親を友達感覚で詠み上げて実にほほえましい作品となっている。

また、高校生の生(ナマ)の感覚である「眠い(眠たい)」、「いたい(痛い)」、「ほろ苦い」、「うらやましい(羨ましい)」、「きつい」等の表現は、短歌、俳句部門にはあまり見られないのに比して、川柳部門に多く見られる。教室での授業を基盤とした伝統的な短歌スタイルや季語などの制約下にある俳句には、生(ナマ)の感覚を織り込むことが難しく、かえって自由な感覚や軽みを主要素とする川柳に高校生の本音が見え隠れするのは当然のことかも知れない。川柳部門で最優秀賞を受賞した「授業中目をそらすのに当てられる」(千葉県立松戸六実高等学校、大森妃月)は、高校の教室に繰り広げられる何気ない光景を鮮明に写し取った秀作である。

4. 語彙に現れる高校生の意識

生活ツールに対する思いもケータイ(携帯電話)、スマホ(スマートフォン)、メール等と言った若い世代が、片時も手放すことのできないものが積み込まれている。短歌部門で優秀賞を受賞した「あなたとねメールをずっとしていたらいつの間にか恋芽生えてた」(埼玉県立川越総合高等学校、高橋真菜)は、現代の若者気質と生活スタイルが見事に合流した秀作である。

この「ケータイ」や「スマホ」の共起語を分析すると面白いことがわかった。図8と図9は川柳の部門におけるそれぞれの言葉の共起語でポジティブな言葉と

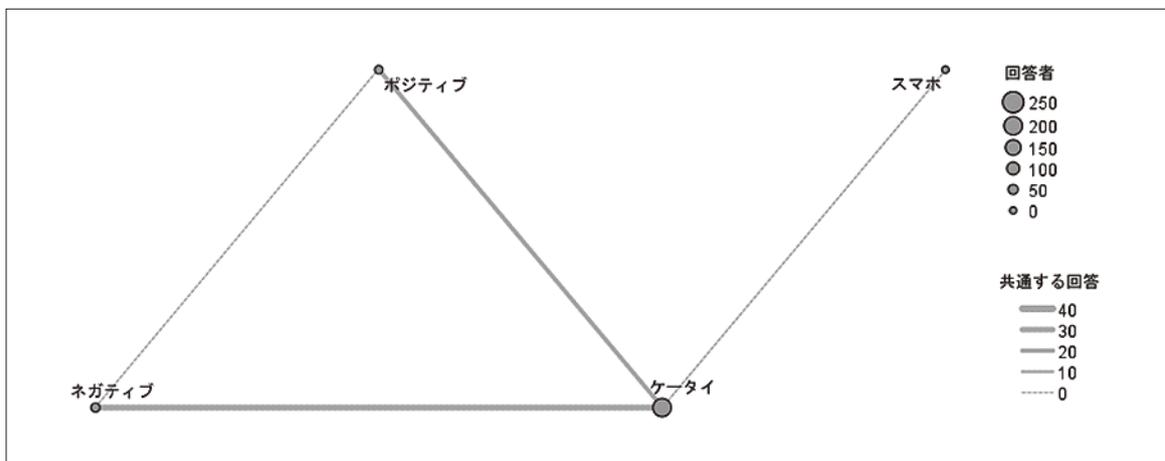


図8 「ケータイ」(川柳部門) 共起分析

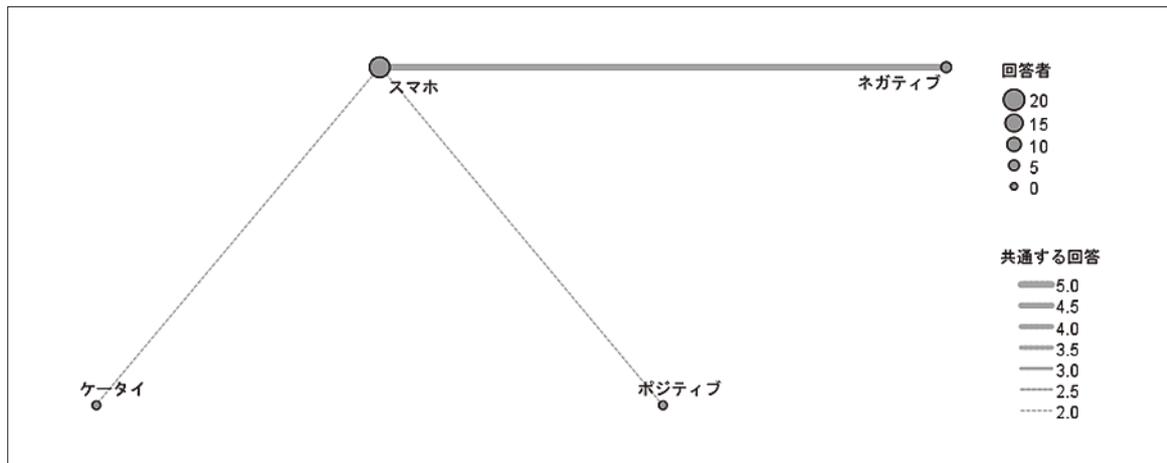


図9 「スマホ」(川柳部門) 共起分析

ネガティブな言葉との関連を示したものである。「ケータイ」という言葉はポジティブ、ネガティブの双方が出現しているのに対して、「スマホ」はネガティブな言葉と結びついていることが多いことがみてとれる。ネガティブというよりは、スマホに対する憧れを悲観的に表現する作品が多く、「持っていない」「まだない」といった言葉が共起している傾向にあった。スマートフォンの普及はこの3年ほどで急増しているが、18歳未満は契約に保護者の承諾が必要なため、携帯電話からの切り替えができない高校生の想いが、ネガティブな傾向として表れたと考えられる。

まとめと今後の展望

- 本研究で明らかになった点は以下の通りである。
- 1、コンテストの応募者は高校2年生が増加する傾向にある一方、1年生の応募者が減少している。
 - 2、学年によって、応募部門に偏りがみられ、1年生は短歌、2年生は川柳、3年生は俳句の割合が高い。
 - 3、コンテスト応募作品を単語レベルに分解したう

え、鑑賞を試みると、高校生の視覚に対する鋭敏さや、生活ツールに対する憧れを表す言葉が、選択的に利用されている傾向にある。

このようにこのコンテストに応募された作品に多く使われた語彙を見てみると現代の若者像と時代相が浮き上がって見えてきた。また、特定の名詞とつながる修飾語(形容詞、副詞等)や連想語との相関関係、あるいは31文字や15文字の限られた文字数の中に同時に使用される名詞等の相関関係を見ていけば、また新たな高校生像を発見できるかも知れない。これに関しては次の機会を待ちたい。

参考文献

- 梶尾いさ子, 2008, てゆーか、短歌のことも、やっぱ、変化とかしてんの?? — 短歌研究新人賞における日本語の変容 —, 短歌研究64巻10号, 63-66
- 林香織, 2013, SNS利用者にとっての「世間」に関する一考察 — 大学生の「見られる」意識を事例に, 情報と社会, 印刷中